⑹　昆虫類　⑮ カマキリ目

カマキリ目昆虫は日本には2科13種が生息し、埼玉県からはこれまでに1科6種が記録されている。本書を刊行するにあたり、そこから外来種1種を除いた5種の在来種を対象に本県における生息状況を調査した結果、その20%にあたる1種をレッドリスト掲載種とした。

これまでのカマキリ目昆虫の掲載種数の変遷をみると、初版と改訂版では掲載が無く、前版ではじめてウスバカマキリ1種が挙げられ、本書でもそれを踏襲している。ただし、前版では本種の生息情報が乏しかったためにDDの評価としたが、その後の調査により生息地が限定されかつ個体密度が低い状況が把握できたため、今回の評価ではEN相当とした。

本目の昆虫類は幼虫期から成虫まで完全な肉食であり、植物質に依存していない。かつ捕獲に特化した前脚や立体視が可能な複眼配置などが特徴であり、屍肉食もほとんどしない捕食種ばかりである。生息環境は樹上から林床・草原など多岐に亘っているが、何れの環境でも生態系の上位に位置している。このため餌資源である小昆虫類の量的な増減の影響を受けやすい種群といえる。現状では掲載種以外の4種は県内各地で良好な生息状況であり顕著な減少はみられないが、都市化した環境では生息が困難になると思われるため、生息環境全体の保全が求められる。

近年になって外来種とされるムネアカハラビロカマキリの県内への侵入が確認された（埼玉新聞，2016）。近県でも東京都八王子市では2000年から（松本ほか，2016）、や神奈川県秦野市周辺などで2006年から確認され（高橋・岸，2016）、各地で増加傾向が見られる。在来種であるハラビロカマキリとの競合が見られ、本種の侵入確認地ではハラビロカマキリの激減が報告されている（間野ほか，2015）。ハラビロカマキリは暖地性の種類であり、本県では低地帯から台地・丘陵帯にかけて生息し北西部の高標高地には見られないため分布の境界域に当たっている。両種は同属の近縁種であるため、松本ら（2016）で示唆された繁殖干渉などの影響が懸念される。現時点では掲載に至らなかったが今後留意が必要であろう。

一方、未だ県内での確認がなされていないが生息の可能性がある種類として、暖地性のヒメカマキリとヒナカマキリが挙げられる。前者は樹上性で後者は照葉樹林の林床性である。ともに東京都と千葉県では生息が確認されている（東京都，2013）（千葉県，2011）。

［付記］次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、日本直翅類学会編（2016）日本産直翅類標準図鑑を参照した。

科　名　カマキリ科

〔和　名〕 **ウスバカマキリ**

〔学　名〕 *Mantis religiosa* (Linnaeus)

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　DD

指定状況　－

【形　態】 体長はオス 52 ～ 66mm、メス 59 ～ 66mm。前翅基節内側に黒班或いは黒環班がある。

【国内分布】 北海道（※）、本州、四国、九州、南西諸島　※分布の再確認が必要

【主な生息環境】 草地環境に生息し、乾燥した疎らな低茎草地の地表付近でよく見られる。そのため河川敷や都市公園内などの人工的な環境で確認されることも多いが、生息地は局地的である。卵鞘は枯れ木や石の下から発見される。

【県内での生息状況】 県内のこれまでの記録は、利根川水系の神流川（上里町）と利根川（本庄市）の河川敷、荒川中流域の熊谷市周辺（旧江南町・旧大里村を含む）であり、未確認情報が秩父盆地と滑川町森林公園にある。これらのうち本種の継続した生息が確認されているのは荒川中流域のみである。他の記録地では、生息可能環境は維持されているが、個体密度が極端に低い状況と考えられる。

【特記事項】 前版では、過去の記録が乏しく、かつ他種との混同の可能性を考慮した。いずれの生息地でも生息密度が極端に低く、絶滅の危険性が高まっている。